

## 2018 年度立命館附属校・提携校 国語科公開授業研究会

附属校教育研究・研修センター

6月20日(水)立命館中学校高等学校(長岡京)で、学校行事として「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」を全体テーマとして全教科の公開授業研究会が開催された。その中で国語科は当センターとの共催で公開授業研究会を実施した。

参加者は、中学校国語は立命館慶祥2人、当該立命館中学から3人、高校から3人、高校国語は当該立命館中学から2人、高校から6人の授業担当者を含めて合計16人であった。

次に内容を報告する。

### 《テーマ》

【研究授業Ⅰ】白川文字学による「漢字の成り立ち」

【研究授業Ⅱ】古典の授業におけるアクティブラーニングの試み

### 《内容》

研究授業Ⅰ	中学2年生「手は七変化」 授業者：村田友美 教材「漢字の成り立ち(手)」(白川文字学教材開発WGのテキストにもとづく)
研究授業Ⅱ	高校3年生「理系古典」 授業者：小山百恵 教材：紀貫之「古今和歌集仮名序 六歌仙」

### 《ねらい》

#### 【研究授業Ⅰ】

「成り立ち」と「つながり」で漢字を学ぶ「白川文字学」をもとに、漢字の新しいとらえ方について考えていきます。得た知識をもとに、グループで話し合い、自分たちで課題を解決していくことをねらいます。

#### 【研究授業Ⅱ】

座学中心となりがちな古典の授業での、アクティブラーニングの可能性を探っていきたいと考えました。生徒たちが古典に興味を持ち、自主的に読む力、鑑賞する力を身につける第一歩になればと思います。

### 《各研究授業について》

#### 【研究授業Ⅰ】

##### 1 授業者の感想

今回の授業のねらいは、「得た知識をもとに話し合い、様々な意見を知って自分の考えを深めること」でした。生徒たちは活発に発言し、意欲的に授業に取り組んでいました。授業の後半は、前半で得た漢字の成り立ちの知識を使いながら、グループで課題について話し合いましたが、生徒の中から「あ、そうか!」という声が上がっていました。話し合いの中で「気づき」があったことが良かったと思います。課題としては、創作漢字の発表の時間があまりとれず、書画カメラで教員が紹介するにとどまってしまったことです。その漢字を創った理由を生徒が皆の前で説明するなど、さらによりよい方法を考えていきたいと思っています。

##### 2 単元観・教材観・学習者観

「漢字」学習といえどとにかく何回も書いて暗記するもの、だった経験はないでしょうか。故白川静先生(立命館大学名誉教授)の文字学にもとづいた漢字の学び方は、漢字の「成り立

ち」を探り、その漢字のルーツをつかむことで覚えていくというものです。一つの基本になる漢字が生まれると、共通の発想をもつ新たな漢字が作られました。同じ発想で生まれた漢字をまとめて覚えることで、忘れにくくなります。また、ルーツを知ること、古代の人々が文字にこめた思いを知り、当時の人々の生活や考え方を知るきっかけとなります。

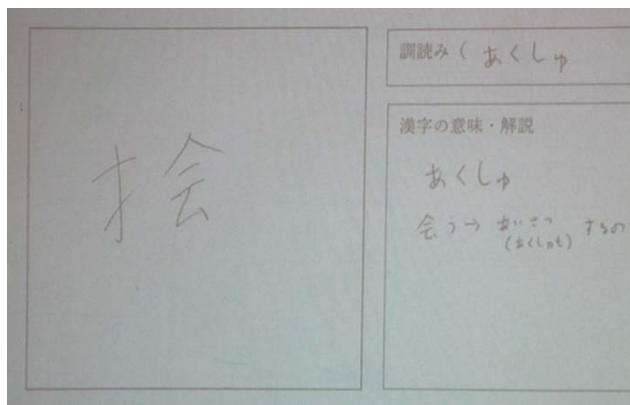
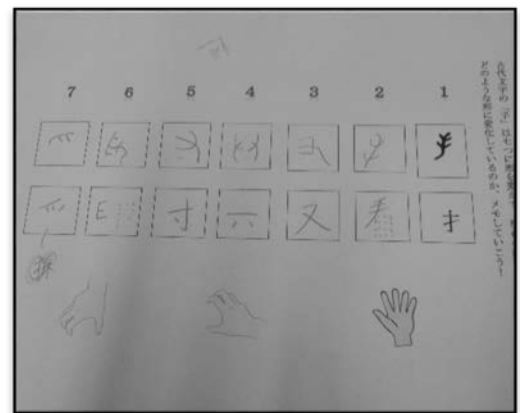
中学2年5組は立命館小学校出身のクラスで、小学校でも「立命科」や「読書」の時間で、白川文字学に親しんできました。白川静先生の研究内容や、研究に対する姿勢については一定知識を得てきており、白川文字学教材開発WGのテキストを高学年で取り組んできています。生徒たちは発問によく反応し、自分の考えを発表することができます。しかし、思いついたことを吟味せずすぐ口に出してしまう面もあるため、よく考えてほしいテーマについては、まず小集団に話し合うことを通して、考えを整理してから発言するように工夫しています。今回の授業の教材は、白川文字学教材開発WGで実践した教材をもとに作成しました。

### 3 授業内容

学習形態は、5～6人を一まとまりとする班学習が心である。

授業展開は、導入の5分で本時の目標と既習事項を確認した後、前半15分でパワーポイントの「手は七変化」の題名通り、7種類の「手」の漢字の変形を具体的な漢字を用いて確認した。次の15分は、授業者が古代文字をいくつか提示し、①その古代文字の中に「手」を元にしていく部分があるか、②その古代文字が現在どのような漢字になっているか、の二点を、班の話し合いによって学習した。話し合いによって提出された解答は「まなボード」と呼ばれる小型のボードに記入し、授業者がそのボードを他の班の学習者に提示した。

最後の15分は、これまでの学習を踏まえ、「手」の意味を含む漢字の部分を用いた新しい漢字を班ごとに創作した。これが全体を通じた授業展開の流れである。創作した漢字は教材提示装置によってホワイトボードに映され、工夫された創作漢字がそれぞれ提案された。各班の新しい漢字が提示され、代表が漢字の成り立ちを説明するたびに「なるほどお」「へえー」といった感心の声があがった。



50分の授業の中で終始一貫していたのは、授業者の質問や問いかけに対して必ず学習者の反応が返ってくるという点である。学級のそのような状況は、授業の展開や学習者の思考と活動のバランス等を綿密に構成し、一つ一つの班の学習活動に対して丁寧に対応することで培われた信頼関係が前提となって成立しているといえる。講義によって知識事項を確認

する前、個人で思考を深める前、そして班で他者と交流することで新しい発想や視点を手に入

れる前、必ず「何を、どのように学ぶ」のかというねらいをしっかりと確認する時間を取る。そのことで、学習者が安心して学習活動を行い、深めた思考や新しく手に入れた発見を積極的に交流するという「アクティブラーニング」が成立していた。さらに、クラスメートの発言に対して多くの学習者の「なるほど」「そうか」といった感嘆や肯定の発言が多く見られたところから、授業者が授業の中で他者性を重要視し、安心して自己表現をできる学習環境を整えてきたことをうかがい知れる。学習者の発言を授業者が温かく受け止めることによって学習者が安心して発言する。そのような反応によってクラス全体が安心して自己の考えを表現できる授業の雰囲気が印象的であった。

授業全体を総括すると、この授業は、漢字練習帳を与え一定の範囲を試験範囲とし、週に一度の小テストを行うだけの漢字学習に一石を投じる新しい漢字学習の方法の提案だといえる。一見すると理解不可能な古代文字の「部分」の成り立ちを理解することを通して言語の記号性を学習し、さらに学習した言語の記号性を応用し、他者とのコミュニケーションを通じて集団で新しい漢字を創作するという総合的な学習活動だといえる。

さらに古代文字を理解するという学習過程は伝統な言語文化への興味・関心を高めるという学習効果も有しているといえる。

(記録 立命館中・高 内田 剛)



## 【研究授業Ⅱ】

### 1 授業者の感想

今回の授業は、「主体的に楽しく古文を読む」ことを目標としました。準備段階から、生徒たちは、文献探しをさまざまな方法（図書室での本探し、ネット検索、過去の授業ノートの見直しなど）で行い、発表資料準備（原稿作り、パワーポイント作成など）にもこだわりを持って取り組んでいました。研究授業では、各班の個性がよく出た発表ができました。授業者のほうで時間配分がうまくできず、発表を振り返る時間が取れなかったのが、大きな反省点です。

研究授業を終えて見えてきた課題としては、まず、生徒の発表に適度に統一性を持たせながら、いかに事前指導をするかということです。あまり縛りを作ってしまうと自由度がなくなるし、自由すぎてもまとまりがない。程よい統一性を持たせるにはどうしたらよいか、今後その方法を模索していきたいと思います。また、評価をどのようにするかという点も、考えていくべき課題として残りました。授業者が何に重点を置き、どのような観点で評価するのか。何をもちて読みや理解が「深まった」とするのか。評価の方法を明らかにしてきちんと示すことにより、生徒たちの発表もより良いものになっていくだろうと思います。

### 2 授業内容

このクラスは、他大学（国公立・医歯薬等）を受験する生徒のコースであり、普段は講義形式が中心なのであるが、この単元の授業は、「和歌」の学習にアクティブラーニングを取り入れ、グループで調べ、発表するというものであった。担当の小山教諭によると、昨年、百人一首の歌について、その優劣を議論させた時、たいへん積極的な討論ができた。今年はグループで取

り組むことでさらに深め、活発なものになるのではないかと考え、その材料として「古今和歌集 仮名序」を選ばれたということである。

授業は、6つのグループが、古今和歌集の撰者の一人である紀貫之が六歌仙（在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・文屋康秀・大伴黒主・小野小町）を批評している箇所を読み、紀貫之の捉え方に賛成か反対かを述べるというものであった。各グループが担当した歌人の和歌を調べ、貫之の批評に自分たちの考えをぶつけ、また別の側面から歌やその歌人の歌風について掘り下げて深めていた。発表担当以外のグループは各自に「振り返りシート」が配布され、発表グループの評価と感想、疑問点などを記入する。

発表では、パワーポイントを駆使し、工夫されたものが多かった。なかでも小野小町を担当したグループは持ち時間を超過したものの、作者の容姿の衰えにしたがって歌にみられる気持ちの変化を、自分たちの視点で説明していたのはよかった。質疑応答の時間が十分にとれ活発なやりとりを見ることができたらさらに興味深いものがあったのではないだろうかと思う。50分間の中で6つのグループが発表し、それに対して質疑応答となると大変盛りだくさんな中身になるため、やはり時間が超過してしまうことはやむを得ないかもしれない。

### 3 合評会

授業終了後、合評会においてはさまざまな意見が出されたが、発表の仕方についての方法や生徒たちが個人で読み、考える時間を持つことの大切さ、生徒に書かせる取り組みなど、参加された方々の平素の授業方法についても意見交換がなされた。また、「振り返りシート」に書かれた疑問や意見などを今後どのように授業で扱うかや発表準備のためのワークシートの必要性など、今後の授業の方法、発表を中心とした授業のあり方に発展し、とても意義深いものとなった。

他大学受験を目指す生徒たちであるため、学習に対する意識も高く、知的好奇心も旺盛であり、大変素晴らしい発表となった。分析することや論理的に発表内容を組み立てていくことなど、この授業で取り組んだことが「古典」の勉強だけにとどまらず、今後の彼らのさまざまな学習面に、どのように生かされていくのかを期待し、また大いに楽しみにしたいところである。

（記録 立命館中・高 西村 佳一）

（編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄）

